様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０１０１０

研究課題名（和文）Arts-Based Researchによる芸術を基盤とした探究型学習理論の構築

研究課題名（英文）Developing the Theory of Inquiry-Based Learning with Arts-Based Research

研究代表者
笠原　広一（Kasahara, Koichi）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３８８１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、芸術が持つ多様な表現の手段や形式を活用して、身の回りの出来事や体験、社会的な事象や関係性を理解し、新たな意味を生み出す方法とされる「芸術に基づく探究: Arts-Based Research (ABR)」に着目し、芸術を基盤とする探究型学習の実践理論を構築することで、美術科教育の固有性の捉え直しと、探究型学習を軸にした美術科教育の実践理論の構築を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果としては，国内のABR研究，とりわけ美術教育分野での研究を大きく発展させることができた。本研究期間に刊行された多数の論文でABRの理論や歴史，最新の研究動向を整理し，教員養成系大学や美術系大学で実践を行い発信することができた。学校教育での展開可能性についても，いくつかの学校で実際に児童とABRに基づく探究実践に取り組むことができたことで，今後の美術教育実践において示唆に富む事例を生み出せた。そして先行する海外の研究者との連携が進んだことや，日本での取り組みが論文や国際学会，書籍を通じて海外に発信され，国際的な研究の協働が進んだことも今後の日本の美術教育研究にとって大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Arts-Based Research (ABR), which is a method of creating new meaning by utilizing various means and forms of artistic expression to understand events, experiences, social phenomena, and relationships in the world around us, and reconsidered the unique nature of art education and developed a practical theory of art education based on inquiry-based learning.

研究分野：美術科教育学

キーワード：Arts-based Research(ABR)　探究型学習　A/r/tography　美術科教育　教科教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

グローバル化と世界情勢の不安定化，人工知能やテクノロジーの飛躍的な発展を受け，21 世紀型スキルを背景に教育の原理とシステムは大きく変化している。学習指導要領改訂を受けて，教科教育には汎用的な知識と技能の観点からの捉え直しが急務とされる。これまで蓄積してきた美術科教育の知的基盤や教科の固有性の上に，どのように新たな実践理論の構築が可能であろうか。そこで，芸術が持つ多様な表現の手段や形式を活用して，身の回りの出来事や体験，社会的な事象や関係性を理解し，新たな意味を生み出す方法とされる「芸術に基づく探究：Arts-Based Research (ABR)」に着目し，芸術を基盤とする探究型学習の実践理論を構築することで，美術科教育の固有性の捉え直しと，探究型学習を軸にした新たな教科概念の拡張を図る研究が必要と考え，本研究に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究は，芸術が持つ多様な表現の手段や形式を活用して探究活動を行う「芸術に基づく探究：Arts-Based Research (ABR)」の理論に基づき，美術科教育における探究型学習活動の基盤となる実践理論を構築することを目的とする。そこで，ABR に関する理論や研究動向の検討といった理論研究に加え，大学での ABR 関連実践と初等教育での ABR の考え方に基づいた実践等を行い，美術教育学分野における ABR の導入的な研究と実践の構築を目指した。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたり，関連研究を進めていた国内の研究者や海外の研究者と連携体制を構築し，理論と実践の両面で研究を進めた。

理論や研究動向については，基本的な ABR の海外文献等に基づきながら，その実践理論と研究の広がりや方向性などを整理して論文にまとめた。研究分担者においては，芸術的省察，鑑識眼，批評などの基盤的概念の詳細な検討や，哲学，学習環境デザイン，インクルーシブ教育など，多角的な視点からの ABR 理論の検討を進めた。

実践化については，代表者および分担者の各大学で，大学院生や学部生を対象に授業を行い，ABR に関する理論の共有と検討を踏まえつつ，各大学固有の取り組みを進めた。

４．研究成果

研究成果としては，国内における ABR 研究，とりわけ美術教育分野における研究を大きく発展させることができたことである。本研究期間に刊行された多数の論文で ABR の理論や歴史，最新の研究動向を整理したことや，教員養成系大学や美術系大学での実践を発信したことで，実践理論の構築が進んだだけでなく，それらの成果を参照して新規に研究や実践に取り組む研究者や実践者らも増えるなど，日本の美術教育研究における ABR 研究の発展に弾みをつける貢献ができたと考える。以下に本研究で行なった，（１）大学教育での実践，（２）初等教育での実践，（３）海外の研究協力者との取り組み，の詳細を述べる。

（１）大学教育での実践

分担者が在籍する複数の大学および大学院で ABR に関連する実践を行なった。まず大学院での実践である。東京学芸大学大学院では院生と東京を歩き自分たちのアイデンティティを模索する実践を行なった。東京の様々な場所を歩く中で感じたこと，新たに気づいた過去の自分との接点，現在の自分の気持ちや違和感等について美術制作と対話と省察を通して探求していくことで，今なぜ「ここ」にいるのか，今後自分が何を求めて進んでいくのかなど，歩くこと，つくること，語る/聞くことを通して，新たな自己のあり様が形作られていく自己探求が生まれた。広島大学では広島平和記念公園を歩くことで広島平和記念公園とは何が目指された場所なのかを探求する実践が行われた。長岡造形大学大学院では，美術デザイン大学である特性を活かし，ABR について ABR で考察する実践と展示を行いながら，実践と理論の往還を深めながら ABR の芸術的知性とは何かを問い深めた。千葉大学大学院では身近な場所を夜に歩くことの経験をもとに机上展覧会を行い，自分自身を世界の内側に位置づけながら進む探求がもつ教育学的な可能性を院生らとともに追求した。

学部教育では，武蔵野大学では幼児教育の学生とともに，歩くこと，描くことを通して，身体性に根ざした偶然的な世界との出会いを，アート的探究を通して具体化していきながら，幼児教育における教員養成と ABR との接点を探った。また，福島大学での実践では，同じく幼児教育における探究的実践を，戸外での自然との出会の中で得た感覚や問いに対し，製作活動を通して探究することで，遊びと製作が一体となった活動が展開する実践を行い，学部での教員養成における ABR の展開可能性の具体化を進めた。

このように，多数の大学のカリキュラムの中で，実際に学生と ABR や A/r/tography に基づく実践を試み，その実践理論化と大学教育での展開可能性を探ることができた。これらを通して，芸術に基づく探究やそこに生まれる芸術的知性が，実際にどのように製作として，探究/研究と

して，教育やワークショップなどの教育的実践として展開可能であるかを探ることができた。それは芸術に根ざす性質上，分かりやすく方法化できるものではないが，様々なタイプの目的や課題の中で，身体感覚や自己や他者との表現活動を通した省察等を通して具体化されていくことがわかった。ABR は大学教育において十分に実践可能であること，そして芸術による新たな教育のあり方として示すことができるものであることがわかった。

（２）初等教育での実践

ここでは分担者が所属する大学の附属学校や研究協力者の勤務する学校で実践を行う機会を得た中で，実際に初等教育における美術教育実践としての展開可能性を探った。

まず，ABR は従来の科学研究のパラダイムに対して新たな芸術の特性に根ざした研究を提起するものであり，認識論の基盤的拡張および存在論的転回を試みるものであり，それを踏まえるならば学校教育における学習論についても，科学と芸術の違いをどのように位置付けながら，新たな学習の考え方を構築していくかが課題となることを示した。

その上で，学習の考え方や目的，方法において ABR を念頭に置くことでどのような理論的考察が必要になるかを検討した。そこでまず総合的な学習（探究）の時間を例に，学校教育における探究の考え方を整理し，そこに ABR がどのように関係しうるかについて学習指導要領等をもとに考察した。次に複数の美術教育の実践アプローチとの違いを検討し，ABR の特徴を浮き彫りにした。次いで評価の問題に対し，芸術的な省察や知性を扱う際に必要な評価の考え方を考察した。

１）幼稚園での実践と研究

それと並行して幼稚園と小学校で実践を行なった。幼稚園では様々な種類の土を園内に用意し，そこからどのような遊びや探究の姿が生まれるか，そのことが保育者や研究者の遊びや表現や子供理解にどのような変化を生み出すかを考察した。その結果，子供は土の様々な特性や関わり方を見つけ出しながら探究を深めると同時に，土という素材がもつ特性や，土が子供に垣間見せるものといった，決して何かを形にするための材料としての土ではない，土によって，土とともに，新たな出来事や出会いにひらかれていく子供の姿が見えてきた。一方で，土を準備する側の環境設定が遊びや子供と土との関係に影響を与えることを慎重に見極めていく必要があることなど，土などの素材との探究を実践者や研究者側がどのように位置付けて考えていく必要があるか，さらなる研究の必要性が提起された。

２）小学校での実践と研究

小学校では２校で実践を行なった。１校目では，小学校３年生で土を用いた実践を行なった。自分につながりのある場所の土を用いて，その物語と素材感等との間に探究を生み出し，土との出会いが自分自身にとっていかなる自己理解や認識を生み出すかを考察した。児童はこれまでも土で何かを表すことに取り組んできているが，今回は何かを表すというよりも，土との対話を通してどのような探究の契機が立ち上がっていくかが重要であった。実施に土を使った製作活動のほか，ドキュメンテーション・ウォールによる展示と振り返りのワークシート等を用いて活動を進めた。この実践から，土にまつわる場所の記憶や思い出，土とそれ以外の材料や用具を使った素材体験，土の色や感触などの知覚体験が探究行為を生起させる活動となることが確認できた。図画工作科の授業において芸術を基盤とする探究の展開可能性を具体的に示すことができた。

また，２校目では，６クラスでワークショップを実施した。クラフト紙を使って身体を拡張する作品製作を行い，日々の学校生活と未来との間に新たな生活のイメージを立ち上げる実践，教室内に紙風船を置くことによって環境の中に潜在する意味を顕在化させながら環境（教室）を探究する実践，墨絵と言葉を使って表す活動を通して学校生活の思い出と環境（教室）との間にあるものを具体化する実践，黒い紙製の枠を使って見える世界をリフレーミングすることで日常の環境にあるものの意味を浮上させ変化させる実践，偶然手に取り混ぜ合わせた絵の具の色を手掛かりに同じ色のものを探し出して環境を探究する実践，学校の中に埋め込まれた長い年月をフロッタージュによって浮かび上がらせ，それを再構成することで学校（学校生活）と時間について考えを巡らす実践などが行われた。これらの実践を通して，芸術に基づく探究は様々な形や実践形態の中で実施することが可能であることが明らかになった。一方，それが環境への新たな理解や芸術の特性に根差した知を立ち上げることへ実践者や児童をどう誘っていくかについては，さらなる検討が必要であることがわかった。

以上のように，ABR の考え方を学校教育の文脈上で展開することを試みることは，結果的には，理論の適用や応用というよりも，今までの実践やその背景にあった我々の美術教育実践についての考え方を再検討することへとつながることが多く，同時に子供たちはこうした芸術の特性を生かした探究に取り組むことは十分可能であることが多くの例から示唆された。しかし，教師や研究者はそれぞれに芸術や表現に対する考え方を身体化しており，それ自体をいかにアップデートしながら学び直していくかが ABR に取り組んでいく上で重要であることもわかった。

（３）海外の研究協力者との取り組み

本研究では期間中に多くの海外の研究者や実践者と連携しながら取り組みが進んだ。2019 年

までは海外からの招聘もなされたが，2020 年以降は新型コロナウイルスの感染拡大のため，海外渡航が難しくなり，その間はオンラインでの研究交流などを進めた。

海外からの招聘では，研究者によるワークショップや講演会などを実施した。まず，カナダからはリタ・アイーウィン教授とアニタ・シナー教授が来日し，ABR と A/r/tography に関する理論と実践を紹介した。アーウィン教授はその後も東京学芸大学の授業やプロジェクトで度々助言を行なった。スペインのフェフナンド・ヘルナンデス教授は ABR について考えるためのワークショップを開催し，あらかじめ何が生まれるか分からない芸術による探究について理解することがどういうことかを身を以て教えてくれた。中国からは胡俊教授が来日し，特別支援学校での A/r/tography 実践を紹介した。視覚障害者のための実践ではなく，視覚障害者による実践（ワークショップ）であり，また，作品制作を行う実践理論として A/r/tography を用いることで，特別支援教育の立ち位置そのものを大きく変化させる取り組みを示した。実際にそこで行われている版画製作ワークショップも実演してもらった。

この他，期間中にカナダ，オーストラリア，フィンランド，韓国などでもワークショップや研究交流を行い，ABR が各地でどのような実践や理論として展開し，実際に大学や大学院でどのような実践として行われているのかを学び合うことができた。それは単に ABR の受容ではなく，これらの交流を通して一緒に新たな実践理論を生み出していく取り組みにもなっていた。

（4）研究成果のまとめ

途中，新型コロナウイルスの感染拡大により，特に学校での実践が難しくなり，理論研究を反映させた実践を段階的に進めることができなくなり，理論と実践の往還や整合については課題も残った。しかし，新たな実践の考え方に対して関心をもって受け入れてくださった学校園や研究機関によって多くの実践や研究の機会をいただき，研究は大きく発展した。本研究の成果を通じて，多くの大学で ABR の関連実践を実装する足がかりが生まれたと言える。また，実際に学校園においてもこうした視点での実践や研究が可能であることも示され，今後の ABR と美術教育研究の具体的な交点を理論的・実践的に示すモデルとなる成果が得られたと考える。

そして今回，海外の研究者との連携が大きく進んだことも大きな成果である。複数の ABR 関係の研究者と国際共同研究に取り組み，実践や研究発表を行いながら進めることができた。日本での取り組みが ABR の受容にとどまらず，日本の大学や学校等の固有の文脈の中で取り組まれた事例や研究を，論文や国際学会での発表，国内外で刊行される書籍を通じて海外にも複数発信することができた。世界が共通して直面する美術教育の今日的問題に対して，日本の美術教育者（実践者や研究者）による積極的な貢献が可能である可能性を提起することができたと考える。

日本での ABR 研究は最初のフェーズから次の段階へと移行しつつあるが，そうした動きの原動力となるような研究を多数生み出すことができたことが本研究の最大の成果と考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Koichi Kasahara	４．巻 -
２．論文標題 What Kind of Sociality Do Pre-service Teachers Discover Through Photograph Taking and Dialogue?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 SPECIAL ISSUE InSEA Congress 2018: Scientific and Social Interventions in Art Education	６．最初と最後の頁 805-831
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Chihiro Tetsuka, Maho Sato, Koichi Kasahara, Satoshi Ikeda.	４．巻 -
２．論文標題 Diversity × Color: Understanding Cultural Diversit	５．発行年 2019年
３．雑誌名 SPECIAL ISSUE InSEA Congress 2018: Scientific and Social Interventions in Art Education	６．最初と最後の頁 1311-1326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Koichi Kasahara	４．巻 -
２．論文標題 Significant In/Sight Sustaining Myself: A/r/tographic Inquiry with Walking and Mapping Methodologies	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Imaging Social Innovation: Expanding the Social Role of Art Education, 2019 SAEK International Conference	６．最初と最後の頁 188-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田吏志、新井馨、遠地千智、掛志穂	４．巻 25
２．論文標題 幼稚園における遊びを取り入れた「表現」に関する実践的研究－小学校図画工作科「造形遊び」との共通性を踏まえて－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 学校教育実践学研究	６．最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/47503	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田吏志	４．巻 Vol. 63－2, NO. 434
２．論文標題 立体の授業で捉える資質・能力とは～三つの柱を枠組みとして～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 造形JOURNAL	６．最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kayoko Komatsu	４．巻 19
２．論文標題 Jeremy Bentham and ‘Citizenship Education’	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Revue d’etudes benhamiennes	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/etudes-benthamiennes.6300	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小松佳代子・櫻井あすみ	４．巻 17
２．論文標題 美術制作におけるアトラス的な知―空間と時間のレイヤー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 長岡造形大学紀要	６．最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 笠原広一	４．巻 70
２．論文標題 5th Conference on Arts-Based Research and Artistic ResearchにみるArts-Based Researchの国際的な研究動向	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京学芸大学紀要．芸術・スポーツ科学系	６．最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 笠原広一	４．巻 40
２．論文標題 Arts-Based Researchによる美術教育研究の可能性について その成立の背景と歴史及び国内外の研究動向の概況から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 美術教育学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小松佳代子・橋本大輔	４．巻 16
２．論文標題 新しい実在論理論的射程と美術の探求	５．発行年 2019年
３．雑誌名 長岡造形大学研究紀要	６．最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茂木克浩・茂木一司	４．巻 54
２．論文標題 中学校美術科教育におけるＰＢＬ学習の再検証-インクルーシブデザインの視点から-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編	６．最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田吏志	４．巻 1233
２．論文標題 児童の可能性を広げる図画工作へ―Arts-based Researchに着目して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校教育	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計46件（うち招待講演　13件／うち国際学会　19件）

1．発表者名 Koichi Kasahara
2．発表標題 Significant In/Sight Sustaining Myself: A/r/tographic Inquiry with Walking and Mapping Methodologies
3．学会等名 Imaging Social Innovation: Expanding the Social Role of Art Education, 2019 SAEK International Conference（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Koichi Kasahara
2．発表標題 Walking in Koyasan the Holy Site: The Creation of Practices to Connect with Peace and Fate in Everyday Life
3．学会等名 The 2nd A/r/tography Asian Symposium（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Koichi Kasahara, Chihiro Tetsuka, Maho Sato, Satoshi Ikeda, Kazuji Mogi, Kayoko Komatsu
2．発表標題 The Color Arrangement Workshop: as a Method of A/r/tography
3．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Koichi Kasahara, Toshio Ishii, Takashi Takao, Satoshi Ikeda, Kayoko Komatsu, Kazuji Mogi, Minako Kayama, Kaho Kakizaki, Chihiro Tetsuko, Maho Sato.
2．発表標題 A/r/tographic Inquiry through Kumano Kodo Pilgrimage Trails Walking
3．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Nicole Lee and Rita Irwin, Alexandra Lasczik, Joaquin Roldan and Ricardo Marin, Daniel Barney, Jun Hu, Valerie Triggs and Michele Sorenson, Anita Sinner, Koichi Kasahara and Rocio Lara-Osuna
２．発表標題 Mapping A/r/tography through Walking Methodologies Part 1
３．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nicole Lee, Rita Irwin, Alexandra Lasczik, Jun Hu, Koichi Kasahara, Joaquin Rodan, Ricardo Marin Videl, Rocio Lara-Osuna, Anita Sinner, Valerie Triggs, Michele Sorensen and Daniel Barney
２．発表標題 Mapping A/r/tography through Walking Methodologies Part 2
３．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koichi Kasahara
２．発表標題 Present and future places of arts-based research within the current educational reform in Japan
３．学会等名 The 6th Conference on Arts-Based Research and Artistic Research（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koichi Kasahara, Toshio Ishii, Takashi Takao, Satoshi Ikeda, Kayoko Komatsu, Kazuji Mogi, Minako Kayama, Kaho Kakizaki, Chihiro Tetsuko, Maho Sato
２．発表標題 A/r/tographic Inquiry through Kumano Kodo Pilgrimage Trails Walking
３．学会等名 Mapping A/r/tography Retreat（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 笠原広一，森本謙
２．発表標題 日本でのA/r/tographyとArts-Based Educational Researchの実践
３．学会等名 国際アートグラフィーセミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田吏志
２．発表標題 ABR（Art-based research），A/r/tographyとは何か－多様な価値を包摂できる学校教育実践への接続を視野に－
３．学会等名 国際研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satoshi Ikeda
２．発表標題 Eliminate Boundaries: Inquiry regarding tolerant inclusion
３．学会等名 Mapping A/r/tography InSEA 2019 Exhibition（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satoshi Ikeda
２．発表標題 Walking as a catalyst to create questions: Inquiry regarding tolerant inclusion
３．学会等名 Mapping A/r/tography InSEA 2019 Exhibition（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Gabriella Pataky & Maho Sato
２．発表標題 3612+ Bamboo Tandem: Creating unique cultural learning processes for MAKING in teacher training courses of Hungary and Japan
３．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤真帆，清水将大，中村一仁，根元翔太郎，持田彩加
２．発表標題 hallenge A/r/tography in Chiba
３．学会等名 あなたを支えるものはなんですか？Exhibition on the table, Exploring your learning to learn 報告展示
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤真帆，清水将大，中村一仁，根元翔太郎，持田彩加
２．発表標題 Challenge A/r/tography in Chiba
３．学会等名 Exhibition on the table, Exploring your learning to learn報告展示
４．発表年 2019年

１．発表者名 小松佳代子
２．発表標題 知性を育む美術教育
３．学会等名 上伊那美術教育研究会総会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kayoko Komatsu
２．発表標題 Arts-Based Research through the Making of an Image Atlas: Circulation of Appreciation and Creation
３．学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小松佳代子
２．発表標題 アートがもたらす知性―ABRの実践研究
３．学会等名 日本教育心理学会　第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 手塚千尋，岩永啓司，吉川暢子
２．発表標題 プロジェクト型学習からArts -Based Research型実践へ―「土の色プロジェクト」の考察を中心に―
３．学会等名 大学美術教育学会第58回岐阜大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koichi Kasahara
２．発表標題 Understanding Relationship between Self and Society by Photography and Dialogue
３．学会等名 European Regional InSEA Congress 2018, Interventions.(Finland）.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Chihiro Tetsuka, Maho Sato, Koichi Kasahara, Satoshi Ikeda, Kazuji Mogi
２．発表標題 Diversity×Color: understanding Cultural Diversity
３．学会等名 European Regional InSEA Congress 2018, Interventions.(Finland）.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 手塚千尋
２．発表標題 美術（アート）の協同的創造によるカリキュラム開発Ⅱ―協調的問題解決スキルの領域固有性に関する考察―
３．学会等名 第57回大学美術教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小松佳代子
２．発表標題 美術教育の可能性―鑑賞と制作の往還に着目して
３．学会等名 上伊那美術教育研究会総会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小松佳代子
２．発表標題 ABR(Arts-Based Research)とは何か？
３．学会等名 Arts-Based Practices in Formal and Informal Education in Japan 研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小松佳代子
２．発表標題 ABR on ABR展に至る経緯
３．学会等名 判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

１．著者名 小松佳代子	４．発行年 2019年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 412
３．書名 「教育学から見たディレッタンティズムの可能性」佐藤直樹編『芸術愛好家達の夢―ドイツ近代におけるディレッタンティズム』	

１．著者名 笠原広一，リタ・L・アーウィン編著	４．発行年 2019年
２．出版社 学術研究出版ブックウェイ	５．総ページ数 393
３．書名 アートグラフィー：芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法	

１．著者名 Joaquin Roldan, Ricardo Marin-Viadel, Marzieh Mosavarzadeh, Ken Morimoto and Rita L. Irwin. eds., Koichi Kasahara, Ken Morimoto, Maho Sato, Chihiro Tetsuka, Ryoji Namai, Yuka Kuriyama, Akihisa Komuro, Minako Kayama, Jianan Ding and Keiji Iwanaga.	４．発行年 2023年
２．出版社 Tirant Humanidade.	５．総ページ数 408
３．書名 Visual methods, a/r/tography & walking in educational research	

1．著者名 Nicole Rallis, Ken Morimoto, Michele Sorensen, Valerie Triggs, Rita L. Irwin. eds., Koichi Kasahara, Nanami Inoue, Mika Takahashi, Chiaki Hatakeyama, Yukito Nishida, Takeshi Kawahito, Naoko Kojima, Kanayo Ban, Sosuke Ikeda, Momoka Kiyonaga and Kanae Shimoji.	4．発行年 2024年
2．出版社 Intellect	5．総ページ数 269
3．書名 Walking in Art Education: Ecopedagogical and A/r/tographical Encounters	

1．著者名 Nicole Y. S. Lee, Marzieh Mosavarzadeh, Joanne Ursino, & Rita L. Irwin. eds., Koichi Kasahara, Saki Ishii, Taichi Nishina, Gui Rong, Zhou Yongee, He Zhancheng, Zheng Shan, Kei Tajima, and Rise Shoji.	4．発行年 2024年
2．出版社 Material and Digital A/r/tographic Explorations: Walking Matters	5．総ページ数 422
3．書名 Springer Nature	

1．著者名 Alexandra Lasczik Rita L. Irwin Amy Cutter-Mackenzie-Knowles David Rousell Nicole Lee. eds., Koichi Kasahara, Satoshi Ikeda, Kayoko Komatsu, Toshio Ishii, Takashi Takao, Kazuji Mogi et al.	4．発行年 2022年
2．出版社 Palgrave Macmillan	5．総ページ数 197
3．書名 Walking with A/r/tography	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	池田　吏志 (Satoshi Ikeda) (80610922)	広島大学・教育学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	手塚　千尋 (Chihiro Tetsuka) (20708359)	明治学院大学・心理学部・准教授 (32683)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	茂木　一司 (Kazuji Mogi) (30145445)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	
研究分担者	佐藤　真帆 (Maho Sato) (30710298)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	児美川　佳代子（小松佳代子） (Kayoko Komatsu) (50292800)	長岡造形大学・造形研究科・教授 (23103)	
研究分担者	吉川　暢子 (Nobuko Yoshikawa) (20412554)	香川大学・教育学部・准教授 (16201)	
研究分担者	岩永　啓司 (Keiji Iwanaga) (20758445)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究分担者	小室　明久 (Akihisa Komuro) (80847088)	中部学院大学短期大学部・幼児教育学科・助教 (43707)	
研究分担者	生井　亮司 (Ryoji Namai) (20584808)	武蔵野大学・教育学部・教授 (32680)	
研究分担者	栗山　由加 (Yuka Kuriyama) (20848535)	東京学芸大学・教育学部・研究員 (12604)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 International A/r/tography Seminar（国際アートグラフィーセミナー）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 A/r/tographyによるインクルーシブアート教育の実践―視覚障害児とのアート活動の理論とデザインワークショップ―	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Making A/r/tographic Pathways	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関